

宮崎会員の随想「忘れ得ぬ労使の人々」番外編第24話

「天衣無縫の自由人」 野坂昭如 作家

8月15日、忌まわしい終戦記念日がまた巡って来た。この日を迎えると必ず思い出すことが二つある。

旧満州大連市で私は生まれた。父を戦争で亡くし残された母が幼い私と弟を必死の思いで守り抜き日本へ連れ帰ってくれた。その母の筆舌に尽くしがたい大変な苦勞と、もう一つは野坂昭如の著した「火垂るの墓」の物語である。

今年も二つの思いが心に浮かび自然に涙が滲んでくる。戦争さえなければとこれまで何度独り呟いてきたことであろうか、争いは人間のサガとしか思えないが今に至るも地球上では戦禍が絶えない。まことに悲しい人のサガである。

火垂るの墓の作者野坂昭如氏に面識を得たのは親友の紹介である。氏と親交のある友人が、私の主催している会に講師として招聘の勞をとってくれたのである。

売れっ子の野坂氏の謝礼相場は、一時間五十万円と聞き、予定している予算枠では到底収まらないのである。その後友人の骨折りで当方の予算内で結構だという返事もらった。

講演の日の朝、会場のホテルの控室に茶色のダブつき気味の皮ジャンパーを羽織った男が何も言わず、のっそりと入って来た。

ちょっと見には競輪場をうろつくおっさんと見まごういで立ちである。誰かと思ひ腰を浮かせてよく見ると、彼の野坂昭如氏であった。



講演を前に右野坂昭如氏

名刺交換をして椅子に腰を下ろしながら講演の後大阪へ出かけるのだと言ったが、ご機嫌が悪いのか黙して語らず、こちらは何を話しかけていいか判らず少なからず戸惑った。

この講演会は特段ドレスコードを定めてあるわけではないが、講師も参加者もネクタイ、背広着用が当たり前となっているのに野坂氏はジャンパー姿でそのまま壇上に上がり、椅子に座るや、やにわに熱のこもった早口の口調で、最近の日本の世相を嘆き日本かくあるべしと談じたのである。

野坂氏の講演は経営者が普段聞く経営や経済に関わるものとは全く異なる話で、齒に衣着せない率直な語り口は聴

く者の心に新鮮な印象を与えたのだろう大好評であった。

友人の話によれば野坂氏のお嬢さんは宝塚のスターだという。野坂氏の顔と引き比べながら、きっと夫人は大層美しい方なのだろうと想像しながら可笑しさがこみ上げてきた。

その後友人から“野坂昭如全集”が刊行されると聞きおよび、私は全刊購入したいと頼んだ。届いた全集のすべての本には達筆とはいいがたいが丁寧な字でサインが認められていた。

意外にこういうところはきちんとされているのだなと思ひながら本棚の永井路子さんの著作の横に並べ

た。

テレビで何のCMか忘れたが「ソクラテスかプラトンか・・・」と野坂さんが踊りながら歌っている場面を不意に思い出した。そしてこの方は多彩な才能を持った方だと思ったものである。

ある時結婚式に招かれ主賓席に案内された。驚いたことに何と隣席は思いがけなく彼の野坂昭如氏ではないか。

さっそくご挨拶し、いつか横浜で講演いただいたお礼や、サインしていただいた全集の話など取り留めない話を交わしたがこの日の氏は饒舌であった。

そうこうするうちに間もなく式が始まり新郎新婦が入場してきた。それまで独りしゃべり続けていた野坂氏は急に黙り込み、式の進行を見詰めつつ杯を傾けている。



共に結婚式に招かれて右野坂氏

宴たけなわとなり、新婦がお色直しに立つたころから会場は賑やかにざわめき、そこここで私語が交わされ始めた。

式が始まってしばらく黙っていた野坂氏が、私の肩肘を突つきながら小声で「あの嫁さんはえらい美人ですな、美人はいいものですね。あなたそう思いませんか？」と話しかけてきた。

「本当にきれいですね、新郎も幸せそうな顔をしていますよ」「うーん、きれいだなあ」と腕組をしながら、感に堪えかねたような呟きを漏らした。

野坂さんから問わず語りに聞いたところによると、宝塚にいるお嬢さんと今日の主役である新郎は幼友達で、しかもご近所同士で行き来があるのだそうだ。

新婦が入場してきた。大きな拍手が湧きおこり会場は大盛り上がりである。突如野坂氏は

私の耳元で「宮崎さん、ちょっと疲れたけど、ここで抜け出し帰っちゃあ失礼かな？」と囁いたのである。

私は小声で「先生ここはおめでたい席です。それに先生は主賓です。いま席を立つと目立ちますし、もうちょっとご辛抱なされた方がいいとおもいますが・・・」「そういうものかね。もう少し我慢するか？」そういって口を閉じた杯を傾けた。

唐突に「あなたは今の政治をどう見えていますか？」と議論を吹っ掛けてきたのである。結婚式のためたい席に不釣り合いな話題であり、政治の話はともすると不毛の議論になるので私は政治と宗教の話になるとうっかり話のにらないように心掛けているのであるが、さてはこの方は酒癖が悪いのかなと一瞬思ってしまったがどうもそうではない。年度や数字に関して驚くほど正確に記憶され、しかも話すことは明快で筋が通り、くだを巻いているようにはとても思えないのである。



議論を吹っ掛けてきた右野坂氏

この方は天衣無縫な方だと思いながら、結局式が終わるまで話し相手を務めた。

後日招いてくれた友人は野坂さんが最後まで式にいてくれたのは、あなたが話し相手になりお守りをしてくれたお陰と礼を言われて、そうだったのかそういう役回りだったのかと納得したものである。

その後TVの画面で野坂氏が映画監督の大島渚氏の頭をぽかりと叩いた映像を目にしたのである。びっくりしたが画面を見ながら野坂さんらしいやと思わず声を出してしまった。

ところでこれまで私が接した作家といえば、野坂昭如氏の他は永井路子氏と猪瀬直樹氏の3人だけである。永井路子氏は生産性本部の部員に紹介され講演やパーティーの席上で何度かお目にかかった。

その時よく本を読むが女流作家の本は特段意識しているわけではないがこれまで読んだことがないと何気なく話したことがあった。



作家永井路子氏

きっとそのことが頭に残っておられたのであろうか、講演後控室で重そうに下げていた紙袋からご自身の著作を何冊も取り出し、これは私の書いたものですが、これからはぜひ差別しないで女流作家のものも読んでくださいなとって手渡された。

決して意識あって差別をしているわけではなくたまたまであるが……。さらに驚いたことにこちらからお願いをしてないのにハンドバックから持参の筆を取り出し、見ている前ですべての本に見事な筆致で墨黒々とサインをされたのである。

永井路子さんは非常に上品な才女の印象が強い方であった。

猪瀬直樹氏は私と同郷であり小説家というより理論武装に長けた政治家と思っていたのである。主催する会で講演を

お願いした。

お目にかかった時、私の従兄が猪瀬氏のご父君の教え子であることを告げた。するとびっくりしながら故郷談義に花が咲いた。

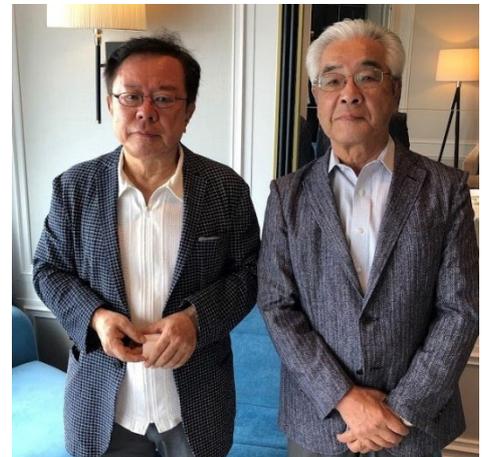
テレビの画面で見ると猪瀬氏の笑顔は見たことがないし、あのしかめつらが良く似合う方だと思っていたが故郷の話になると、ほほを緩めにこやかになったのである。

それは人が見せる呵々大笑する笑顔とは異なる、ちょっと見にはニヒルな感じの猪瀬流笑顔であった。

ところで余談であるが、面識はなく見かけたただがかつて上野の博物館で松本清張氏とすれ違ったことがある。唇がとても厚い独特の風貌であり、一度見たら忘れることのない顔で失礼ながらとても男前とはいかない容貌であった。

その意味では猪瀬氏も野坂氏も容姿端麗とは言い難い方々である。猪瀬氏に至っては森元総理がうまい表現をした。猪瀬さんの顔は「ごつい顔」と評したのである。

お目にかかった野坂氏や猪瀬氏、それとすれ違っただけの松本清張氏、何れも森喜朗氏の弁を借りれば



左猪瀬直樹氏

「ごつい顔」である。著作は人を引き付けて離さない見事なものなのに・・・もっとも作品は顔や容姿で書くわけではないのであることは判っているが、書いた作者の風貌とのギャップが大きすぎてどうも作品のイメージと合わないのである。

私は多分、作家とは理知的で物思いに耽る人物だと勝手に思い描いているのだろう。そのイメージに合致する作家を頭に浮かべてみた。

いずれも写真でしか知らないが島崎藤村、芥川龍之介、司馬遼太郎、吉村昭、五木寛之、津本陽、開高健等の思い浮かぶ諸氏は、いかにも作家然としたそれ相応の雰囲気を持っているように感じるのである。

ビジネスの社会で交流のある方々の人物像とは全く異なる“自由人”と呼ばれる人たちの考え方、生き方を少しだけ覗き見る機会があったが、普段時間や人間関係に縛られ苦勞している人間からすると少し羨ましく感じるのである。まあ自由人は自由人の悩みや苦勞も当然あろうが。

火垂るの墓の悲しい場面を思い起こしながら脱線気味の方向へ思考が進んでしまった。

これも終戦から80年も経ってしまった記憶の風化というものであろうか。もし野坂さんが傍におられたら肘を突つきながら議論を吹っ掛けてきそうだ。

地球上から戦火が途絶え永の平和の訪れを祈りつつ、自分自身の悲しみの連鎖もここらへんで断ち切りたいと強く願っているのだが。